

Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.13 No.12 December 2012

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
領土問題解決へ…
／深谷忠一 1
- ・ 天理教海外伝道の資料 (34)
満州伝道関連史料^⑩
／深川治道 2
- ・ 天理教伝道史の諸相 (12)
関東の天理教—その2—
／早田一郎 3
- ・ 「おふでさき」の有機的展開 (8)
中間考察^①
／深谷耕治 4
- ・ 「いのち」をつなぐ—生死の現象 (12)
死をどのように考えてきたのか^③
／堀内みどり 5
- ・ 「襲のあわいに深く入り込んでいって…」
をめぐって (6)
襲のあわい—その火口^⑥
／松田健三郎 6
- ・ ノーマライゼーションへの道程 (10)
まちづくりを考える
／八木三郎 7
- ・ 世界平和のための宗教対話 (35)
第二ヴァチカン公会議開催より 50 年
／山口英雄 8
- ・ 平成 24 年度公開教学講座「信仰を生きる」：『逸話篇』に学ぶ (1)
第 6 講：31 「天の定規」
／澤井義則 9
- ・ English Summary 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
第 253 回研究報告会／第 9 回奈良県宗教者フォーラムに出席／平成 24 年度特別講座「教学と現代 9」のご案内／第 1 回「宗教と環境」研究会を開催／第 3 回 宗教と環境シンポジウムを開催

巻頭言

領土問題解決へ…

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

『稿本天理教祖伝逸話篇』67 頁には、次のような逸話が載っています。

「ある日のこと、お屋敷からもどつて、夜遅く就寝したところ、夜中に、床下でコトコトと音がする。『これは怪しい。』と思って、そっと起きてのぞいてみると、一人の男が、『アッ』と言って、闇の中へ逃げてしまった。後には、大切な品々を包んだ大風呂敷が残っていた。

弥平は、大層喜んで、その翌朝早速、お詣りして、『お陰で、結構でございました。』と、教祖に心からお礼申し上げた。すると、教祖は、『ほしい人にもろてもろたら、もっと結構やないか。』と、仰せになった。弥平は、そのお言葉に深い感銘を覚えた、という。」

今から 30 年ほど前、筆者が会長をしていた教会では、玄関の扉は 24 時間施錠していませんでした。参拝者に昼夜何時でも参拝して頂けるようにと開放していたのです。

それで、何度かコソ泥に入られました、その度ごとに未遂に終わって、「お陰で結構でございました」で済んでいました。ところが、ある日ついに、礼拝場内にあった御供箱ごとゴッソリと持っていかれる事件が起きました。つまり、「お陰で結構でした」から、「貰ってもらって結構」の段階になったのです。

しかるに、「お陰で結構だ」とはすぐに思えても、「貰ってもらって結構だ」とはなかなか思えません。その時も、盗みに入られた我が身の不徳については反省しても、盗まれて良かったとは全く思えません。また、「もし教会に女と子供しかいない時、特に夜分などに侵入者があつたらどうなるか？」とか、「信者さんからの真実である御供を、欲しいからとて自由に持っていかせてもよいものか？」などという思いも湧いてきました。それで、その事件以後、夜分は教会の正面玄関にもカギをかけるようになったのです。

このように、今では、教会も施錠が必要な世相になってしまいました。私たちの日常でも、部屋や車のカギからクレジット・カードやパソコンの暗唱番号まで、ありとあらゆる場面で、カギを使わないと生活ができません。

しかし、そういう中でも、信仰者たる者は、教祖の教えの「欲する人には与えよ」が通用

する世のようにする努力は、諦めずに続けなくてはならないとも思うのです。

このことに関して、同じ『逸話篇』の 194～195 頁には、次のような逸話が載っています。「泉田藤吉は、ある時、十三峠で、三人の追剥に出会った。その時、頭にひらめいたのは、かねてからお仕込み頂いているかしの・かりもの理であった。それで、言われるままに、羽織も着物も皆脱いで、財布までその上に載せて、大地に正座して、『どうぞ、お持ちかえり下さい。』と言って、頭を上げると、三人の追剥は、影も形もない。

余りの素直さに、薄気味悪くなって、一物も取らずに行き過ぎてしまうたのであった。」

これが逸話として残ったこと自体が、当時でも希有な信仰実践の姿であった証左でありましょう。しかし、たとえ一人でも、このように丸ごと教祖のお言葉を実行できた先人がいたことは、そのレベルの信仰を目指すことが、100%無理ではないことを示唆してもいます。今の我々でも、真に“かしの・かりもの理”が治まって心が澄み切れば、“羽織も着物も皆脱いで、財布までその上に載せて”を実行できる可能性は必ずあるのです。

そして、この教祖の教えが世界中の人々に行き渡り、誰もが“ほしい人にもろてもろたら、もっと結構やないか。”と言えようになれば、もしかしたら、今騒がしい国どうしの領土問題などについても、

「中国がお望みなら、どうぞこの島を全部中国のものにしてください」「とんでもない、日本こそ、この島をそっくり自分の領土になされるべきです。」

とか、

「ロシアがこの島を必要ならどうぞお使いください」「いやいや、日本に使ってもらった方が有効利用できますからどうぞ…」などという対話がいつの日にか可能になるやもしれません。

たとえ、それが、千里の敷を針の鋏で耕すごとくの難事に思えても、教祖の教えに則しての問題解決を目指すのが、信仰者である値打ちです。そのためには、先ず、自分の心に、教えを丸ごと実行する精神を育むところから、始めなければならないと思う次第です。